

「戦争と一人の女」



2013（平成25）年3月13日鑑賞＜宣伝用DVD鑑賞＞

監督：井上淳一

原作：坂口安吾『白痴』所収（新潮文庫刊）

企画：寺脇研

脚本：荒井晴彦

音楽：青山真治

女（元娼婦、呑み屋の女将）／江口のりこ

野村（飲んだくれの作家）／永瀬正敏

大平義男（片腕の帰還兵）／村上淳

カマキリ（下世話な町工場の親父）／柄本明

大平初子（大平義男の妻）／高尾祥子

大平義男を取り調べる刑事／瀬田直

2012年・日本映画・98分

配給／ドッグシュガームービーズ

<今ドキ、何とも刺激的な邦画が登場！>

若者の「読書離れ」が言われて久しいが、それは純文学や昔の「重たい小説」から離れているだけで、「お手軽小説」の類は今でも若者によく読まれているはず。今ドキの若者は芥川龍之介や太宰治の名前は知っていても彼らの小説を読んだ人は少ないだろうし、「無頼派」と呼ばれていた石川淳、坂口安吾、檀一雄などの作家はその名前すら知らないだろう。檀一雄の『夕日と拳銃』はメチャ面白かったが、坂口安吾の最も有名な『墮落論』は学生運動に前向きに取り組んでいた1967年～68年当時の私には拒絶反応の方が強かった。

「見たい映画がないのなら、自分たちで作ってしまおう」という趣旨で本作をプロデュースしたのは寺脇研氏。文部官僚として「ゆとり教育」を推し進めると同時に映画評論家としても活動している寺脇氏は1952年生まれで、鹿児島・サール中・高を卒業。したがって、1949年生まれで、松山の愛光中・高を卒業した私と似たような世代で、似たような教育環境の人物だ。彼は東大法学部に入り、官僚への道を進んだが、現在の邦画に対する不満の中、見たい映画がないのならあえて「坂口文学」を取り上げてやろうと考え、実行したのは立派なものだ。もっとも、焼夷弾で東京が火の海になるシーンを直接観客に見せない作り方を見ていると、製作費はかなりケチって安上がりになっているようだが・・・。

本作の原作は、坂口安吾の『白痴』に所収されている『戦争と一人の女』。『白痴』には『戦争と一人の女』以外にも、『いずこへ』『白痴』『母の上京』『外套と青空』『私は海をだきしめていたい』『青鬼の禪を洗う女』という、計7編の短編小説が収録されている。また、本作のチラシに踊る文字は、「戦争が終わるまで、やりまくろうか。」という何とも刺激的なもの。本作は2013年の第8回大阪アジアン映画祭の特別招待作品部門で上映されたが、そんな内容だから当然「R18+」指定。私はこんな映画が大好き！そこで、早速宣伝用DVDを借りて鑑賞することに。

<冒頭の会話だけでニヒリズムがブンブンと・・・>

『聯合艦隊司令長官 山本五十六』（11年）は、小料理屋「志津」の女将（瀬戸朝香）やそのなじみ客のダンサー（田中麗奈）を登場させて、「国論」とは別の庶民の率直な気持や生の声を代弁させていた（『シネマルーム28』91頁参照）。しかし、それはかなりキレイごと・・・？本作冒頭に登場する飲み屋の女将で元娼婦の女（江口のりこ）と文士の野村（永瀬正敏）、それに絡む町工場の親父・カマキリ（柄本明）の会話を聞いていると、そう思ってしまう。

もちろん、この野村は坂口安吾自身がモデルだが、「戦争が終わるまで一緒に住み、滅茶苦茶な淫乱生活を送ろう」という会話によって、この女は野村の家に転がり込むことに。「昭和官能文藝ロマン」とチラシに銘打たれた本作最初のベットシーン（今風に言えば）がそこで始まるのだが、何と坂口安吾が描くこのヒロイン（？）は不感症の女。女が不感症になった理由は、女の説明を聞くと「なるほど、そりやぐもっとも」とすぐに納得できるが、さあ野村は今後こんな女とどんな共同生活を、そしてどんな男女関係を・・・？

私の印象では、「無頼作家」の名に最もふさわしいのは前述した『夕日と拳銃』の他、映画『火宅の人』（86年）でそのプライベートな生活を見せつけてくれた檀一雄で、坂口安吾は無頼作家というよりは「虚無作家」＝「ニヒリズム作家」という方がピッタリ。野村と不感症の女との会話を聞いていると、私はそう思ってしまうが、さてあなたは？

<この兵士と『キャタピラー』の兵士の異同は？>

本作の本筋は、戦争末期の東京を舞台として、安モノ文士と元娼婦との奇妙な共同生活（同棲生活という表現は全く美態にそぐわない）を描く中で、坂口安吾の人間観と戦争観を提示すること。しかし同時に、野村とは全く異質の男の視点から、野村以上のニヒリズムと暴力主義を見せつけて坂口安吾の人間観、戦争観を「援護」するのが、中国戦線で右腕を失って帰還してきた兵士・大平義男（村上淳）だ。

中国戦線で四肢を失い言葉を失って故郷へ戻ってきた「軍神サマ」と、それを支え続ける「銃後の妻」の生きザマを鋭く描いたのが、若松孝二監督の『キャタピラー』（10年）。2010年の第60回ベルリン国際映画祭で銀熊賞（最優秀女優賞）を受賞した寺島しのぶの演技はもちろんすばらしかったが、もっとすごかったのは「アー、ウー」といううめき声と目の動きだけ、そしてイモ虫のような身体の動きだけで「軍神サマ」になりきった俳優・大西信満。この「軍神サマ」には当然、食うこと、寝ること以外の欲もあるうえ、今やそれが異常に高まっているから「銃後の妻」は大変だ。

『キャタピラー』はそんなすごい男女関係を若松監督の視点で描いた（『シネマルーム25』215頁参照）が、その若松監督の弟子として満を持して本作で長編デビューした井上淳一監督は、性的欲望は「軍神サマ」と同じながら、妻との間ではそれが満たされない男・大平の不条理さを容赦なく描いていく。大平が妻との性行為に不能になったのはなぜ？それは『キャタピラー』と同じく、中国戦線における殺し尽くし、焼き尽くし、犯し尽くす日々の中で通常の性的感覚を失ってしまったためだが、それはどうすれば「復活」するの？井上監督はそれを、たまたま数名の男たちが一人の女を強姦している姿を見て、これなら自分も・・・と再確認させる形で示していく。なるほど、なるほど。しよせん人間とは・・・？しよせん男とは・・・？

そんなこんなを考えると、本作に見る「帰還兵士」と『キャタピラー』における「軍神サマ」の異同は？

<東京大空襲、大阪大空襲などをどう考える？>

1944年7月のサイパン島での日本軍の玉砕、8月のテニアン島とグアム島の占領によって、アメリカ軍はB29による日本本土への空襲が可能となり、以降次第にその激しさが増してきた。大阪大空襲は1945年3月13日～14日だが、1回目の東京大空襲は1945年3月10日。これによって東京の市街地の4割が焼け野原になり、焼失家屋は約30万戸、死者は8万人以上にのぼったそうだ。そんな悲惨さを戦争孤児の視点から描いた映画が『あしたの元気にな～れ！～半分のさつまいも～』（05年）で、これは1980年に亡くなった林家三平師匠の奥さんである海老名香葉子さんの体験にもとづく原作が基本だった（『シネマルーム8』325頁参照）。

この東京大空襲をテーマにした映画は、他にも工藤夕貴がすばらしい演技を見せた『戦争と青春』（91年）などがある。また、名古屋大空襲は『明日への遺言』（08年）で一躍有名になった。さらに、大阪大空襲によって壊滅させられたアジア最大の兵器工場を舞台とした山本太郎主演の映画『夜を賭けて』（02年）によって大阪大空襲も有名だ。他方、私が全然知らなかった神戸大空襲を描いたのが、

『火垂るの墓』（08年）。これは、野坂昭如の『火垂るの墓』を原作にしたものだが、同作は戦争反対と共に飽食の時代に生きる私たちに飽食の反省を迫るものだった（『シネマルーム20』280頁参照）。

『明日への遺言』だけはテーマが全く違う（『シネマルーム18』243頁参照）が、その他の東京大空襲、大阪大空襲、神戸大空襲を描いた映画はいずれもB29による大空襲の悲惨さを真正面から見すえる中で、その非人間性を糾弾するものだったが、さて「ニヒリズム作家」坂口安吾が描く、東京大空襲は？

<「禁句」と「タブー」破りの連発にカイカン！>

日本では戦後68年ずっと平和が続く中で「憲法改正」を口にすることは禁句とされてきたが、2012年12月の安倍晋三内閣の発足によって少しずつ変化が・・・。他方、2011年の3・11東日本大震災における福島第一原発事故を受けて、原発問題や核（兵器）問題についてそれまで存在していたさまざまなタブーについても少しずつ変化が・・・？

私は何ゴトによらず本音で語ることの大切さを痛感しているから、禁句やタブーが大嫌い。したがって、近時の何ゴトにも「優しい」風潮の広がりの中で、「差別用語の禁止」をはじめとして次々と禁句やタブーが生まれている状況には腹が立って仕方がない。そんな私の目には、はるか上空から飛来するB29の編隊を見て、「なによ、500機ぼっち。まだ3000機、5000機にならないの、口ほどもない」と語ったり、焼夷弾で燃えさかる東京のまちを見て「きれい。花火みたい」と言いながらうっとりとその火を見つめる女の姿は、ある意味カイカン！そんな女と、女の言葉にいちいちうなずいている野村の姿を見ていると、「どうせ日本は負けてなくなってしまう」そして、「どうせ男の8割と女の2割、日本人の半分が死ぬ」というニヒリズムの上であっても、ここまでのセリフを堂々と語らせる坂口文学はやはりすごいと思ってしまう。そんな感覚の2人なればこそ、燃えさかる家の前の庭で急に着物を脱いでセックスをし、興奮することができるわけだ。さらに、柄本明演ずるカマキリもそんな感覚の2人と似たようなニヒリズムの持ち主だから、焼夷弾で燃えてしまった家の残骸見学に行くのは彼にとって一つの楽しみらしい。

学生時代に「背徳の文学」の代表とも言えるマルキ・ド・サドの『ジュスティエヌあるいは美徳の不幸』や『閨房の哲学』等を読んだ時は翻訳が悪いこともあってあまり興奮しなかった。しかし、このマルキ・ド・サドと同じように、敗戦が近い東京のまちにおける共同生活の中で、ここまで禁句とタブー破りを自由に行うことができれば、この男女はかなり幸せでは・・・。他方、『キャタピラー』の「軍神サマ」とは違い、右腕はなくても両足で歩いてどこでも女を連れ出すことができるうえ、左腕一本で女の首を絞めることができる大平の方は、お米をエサにしてあっちこっちで強姦殺人事件をくり返していた。しかし、こちらは禁句とタブー破りではなく、明らかな刑法上の犯罪だから、逮捕されるのは時間の問題・・・。

<戦争が終わった！しかし・・・>

私は本作で元娼婦の女を演じた女優「江口のりこ」を主演女優としてはじめてじっくり見たが、冒頭のベットシーンをはじめとするその大胆な演技に感激。とりわけ、天気の良い日には「お道具」を日光浴させなくちゃ、と言いながら着物のスソをめくるシーンにはビックリ。敗戦に伴う東京裁判のあり方や占領政策のあり方等々ややこしい話は山ほどあったが、女にとって「戦争が終わった」ことを何よりも実感させてくれたのは、戦争中はもんべしか履けなかったのに、これからは堂々とスカートををはけること・・・？井上監督はそんなことをかなり意識しているよう（？）で、戦争が終わると野村の方はだんだん身体の調子が悪くなってくるのに対し、女の方はだんだんスカート姿がまぶしくなってくる。また、戦争が終わるとこの女には食料品の調達をはじめとする生活力のたくましさが目立ってくるようになるから、不思議なものだ。野村の方は、予想に反して戦争が終わり、予想に反して日本が滅びず、予想に反して自分が生きていることに戸惑い、気持の整理がつけられないようだが、その点、女の方は・・・。

<なるほど、こんな接点で2つの物語を>

ネット情報によれば、『白痴』に収録されている『戦争と一人の女』には「同題で2作品あり、冬樹社版の全集が出るまで『戦争と一人の女』といえば『続戦争と一人の女』のことだった。安吾自身が発表直後に前者を葬り去ったため、『続』ヴァージョン1作だけが『戦争と一人の女』になってしまった」わけだ。つまり、この両者は本来は姉妹作で、同じ時間の同じ出来事を、前者は男（野村）の視点で、後者は女の視点で描くという面白い試みだったらしい。そこで、私は早速この両者を読み比べてみたが、確かにそうだった。

このように、『続戦争と一人の女』は女の視点から、『戦争と一人の女』は野村の視点から、奇妙な男女の奇妙な男女関係と戦争観を描いたものだから、そこには大平のような帰還兵は登場しない。つまり、大平を登場させた物語は、終戦直後の日本を震撼させた強姦魔・小平義雄を参考にして、寺脇研氏らが想像力によってつくり出したものなので、坂口文学とは無縁のものなのだ。そのため、本作を観ていても、野村と元娼婦の物語と、帰還兵・大平の物語はそれぞれ個別に進行し、接点は全くないから、この2つの物語は一体どこで接点を？

本作途中から多くの観客はそんな疑問を持ち始めるはずだが、帰還兵と元娼婦との接点ができるのは、戦後になってから。つまり、一方では野村の身体がかなり弱り、他方では女のスカートの色がかなり明るくなってからだ。野村から「お米を食べたい」と希望を聞いた女は「それじゃ、いっぱい銀シャリを食べさせてあげるからね」とタン力を切って（？）まち（闇市）に出てきたものの、特設あてがあるわけではない。そんな女に目をつけ、声をかけてきたのが、米をエサにして女を釣っている大平だったから、女はイチコロ。いつもの手口通り、大平は「ここに行けばお米が手に入る」と欺して女を山奥に連れ込み、殴りつけ、左腕一本で首を絞めて失神させ、ゆっくりとコトを終えと、後は女を殺すだけ・・・。それまでの女はみんなそんな手口どおりにコトが進んでいたが、さてこの女の場合は・・・？それは、あなた自身の目でしっかりと・・・。

<「あいのこ」を産むのではなかったの？>

本作終盤は、片腕の強姦魔・大平の毒牙にかかりながらも、なぜか無事お米を持って帰宅することができたこの女が、ある偶然によってその犯人（＝大平）の所在を知るというストーリー展開になってくる。すなわち、この女が犯人にたどりつくことができたのは、偶然入った店で「支那そば」を注文したところ、偶然後ろの席に座った一人の子供が左手だけでそばを食べようとするので、母親からきつく注意される姿を見たためだが、この偶然はあまりにも重なりすぎ＝出来レースでは・・・？それは、本作を98分に収めるために仕方がなかったのかもしれないが、前半から中盤にかけての緊張感を考えると、少し残念だ。

何の避妊処置もしないまま男と女が性交渉をすれば、妊娠の可能性があるのは当然。したがって、軍隊の慰安所や赤線（売春宿）では、性病と妊娠の防止が最大のテーマだ。ところが、いかなる「神の摂理」か知らないが、全く愛情がないばかりか逆に男に対して憎しみしか持っていない状況でも、性交渉をすれば女は妊娠することがあるからやっかいなもの。もっとも、本作のヒロインはもともと娼婦だから一日に何人の男を相手にしても平気だったし、野村の家に転がり込む時の唯一の条件も男と自由に遊べることだったから、野村との同居生活が始まってからも女は野村以外の男、例えばカマキリとは時々外で「やっていた」らしい・・・。そして、

坂口安吾が本作のヒロインとした不感症のそんな女は、日本の男の8割が死んでしまってもアメリカ兵との間で「あいのこ」を産むと常々言っていたから、妊娠への恐怖もあまりなかったらしい。

去る2月27日に観た問題作『魔女と呼ばれた少女』（12年）では、無理やりゲリラにさせられた少女コモナがゲリラを率いる男タイガーの子供を宿し、これを自力で産むシーンが強烈だったが、さて今、自分が妊娠していることを知ったこの女の子供の父親は？それはストーリーの展開を見ていれば誰でもわかることだが、すごいのは、この女がそれを何の抵抗もなく受け入れていること。この女の何ともものすごい生命力に感心すると共に、坂口文学のニヒリズムを改めて認識することに・・・。

2013（平成25）年3月18日記